

# 英語コーパス学会 Newsletter No. 48

Mar. 7, 2005

■会長：中村 純作  
■事務局：〒615-8558 京都市右京区西院笠目町6 京都外国語大学 赤野一郎研究室  
■TEL：075-322-6103 ■郵便振替口座：00940-5-250586 (英語コーパス学会)  
■URL：<http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/index.html> ■E-mail：[i\\_akano@kufs.ac.jp](mailto:i_akano@kufs.ac.jp)

**JAECS**  
Japan Association for English Corpus Studies

## 第25回大会のご案内

英語コーパス学会第25回大会は、4月23日(土)に、立命館大学衣笠キャンパス [〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1; <http://www.ritsumeit.ac.jp/>] で開催されます。会場へのアクセスは同封の「大会資料」をご覧ください。またこの時期、京都は観光シーズンのため、京都駅周辺のホテルは予約が困難な状況です。遠方より参加される方は早めに宿泊の手配をされることをお勧め致します。

今大会では研究発表3件、実践報告1件とシンポジウムを準備しました。研究発表につきましては、1月30日(日)に立命館大学で開かれた大会準備委員会で審査しました結果、紙谷一彦氏(大阪大学大学院生)の「British National Corpus を用いた body 形および one 形不定代名詞の比較研究」、廣瀬絵美氏(名古屋大学大学院)の「take a picture of はイディオムか? - コーパスとウェブを利用して -」、畠山利一氏(大阪国際大学)の「policeman と police officer の使われ方 - PC 表現の視点から -」の研究発表3件と、中條清美氏(日本大学)と内山将夫氏(情報通信研究機構)の「コーパスを活用する学習活動の提案」の実践報告が選ばれました。

シンポジウムでは、「コーパスと英語史研究 - Helsinki Corpus 以後」をテーマに採りあげました。西村秀夫氏(姫路獨協大学)にコーディネータの労をお執りいただき、塚本聡(日本大学)、福元広二(鳥取大学)、水野和穂(広島修道大学)の3氏にそれぞれの観点から取り上げていただきます。顧問の齊藤俊雄先生をはじめ、英語史の研究者がかなりの数を占める当学会で、今まで英語史に関するシンポジウムがなかったのが不思議なくらいです。ヘルシンキコーパス以後のコーパスを利用した英語史研究の方向性・可能性について、3人の講師が具体的な研究事例の報告を基にお話になります。ご期待ください。

恒例となっております午前中のワークショップでは、田端智司氏の多変量解析のお話を受けて、高見敏子氏(北海道大学)に、Excel を使って MI や t-score などのコロケーションの統計的指標の計算が自力でできるようになることを主眼においたワークショップを行っていただきます。高見先生は最近出版された

『英語コーパス言語学(改訂新版)』(研究社)の第6章「コーパスにもとづく語彙研究」の共同執筆者でもあります。ご期待ください。参加御希望の方は、あらかじめ事務局宛てに、葉書あるいは電子メールでお申し込みください。先着50名で締め切らせていただきます。英語コーパス学会の会員であれば参加費は無料です(非会員の場合は当日会費1,000円)。

大会関連のお知らせは以上です。昨春の京都外国語大学に引き続き、京都での開催になります。会長、大会準備委員、事務局ともどもお待ちしております。

## 『英語コーパス研究』第12号について

『英語コーパス研究』第12号(2005)への投稿状況につきましては、前号のニューズレターでお知らせしましたが、その後の進捗状況をお知らせします。ご投稿いただいた研究論文、研究ノートを査読させていただき、次号の最終的な構成は以下の通りになりました。

・論文4編、研究ノート1編

審査委員の先生方には、お忙しい時期に査読作業を快くお引き受けいただき、丁寧なご助言を賜りました。この場を借りてお礼を申し上げます。現在校正段階に入っていますが、4月23日(土)立命館大学衣笠キャンパスに於いて開催されます第25大会での配布に向けて、編集委員一同、最善を尽くしております。引き続き会員の皆様のご支援ご協力のほどお願い申し上げます。

『英語コーパス研究』編集委員会委員長  
大津智彦(大阪外国語大学)

## 東支部第2回研究談話会のご案内

昨年9月から始まった研究談話会ですが、第2回研究談話会を開催いたします。今回は、お二人の発表講師に、手軽なツールを応用して、コーパス研究に有効活用する手法について発表していただき、その内容について理解を深め相互交流に努めたいと思います。今回は、両講師のご厚意で、単なる発表ではなく、実技講習つきの発表にさせていただきました。参加者の皆様には、ラップトップパソコン(Windowsのみ)をご持

参いただき、実習を体験していただきます。ただし、パソコンなしで参加ご希望の場合は、申込み不要で、当日直接ご参加ください。以下の案内内容は、東支部HPのWhat's Newでも確認できます([http:// english.chs.nihon-u.ac.jp/jaecs/](http://english.chs.nihon-u.ac.jp/jaecs/))。

開催日時：2005年3月27日(日)

受付開始：12時30分 終了予定午後6時

開催場所：中央大学理工学部(後楽園)キャンパス 5号館2階5233教室

([http://www.fse.chuo-u.ac.jp/guide/00\\_guid.html](http://www.fse.chuo-u.ac.jp/guide/00_guid.html))

会場までのアクセス方法

- ・地下鉄丸の内・南北線「後楽園」から徒歩5分
- ・都営三田線・大江戸線「春日」から徒歩7分
- ・JR 総武線「水道橋」から徒歩15分

参加費：1,000円(学生500円 会員無料)

持参パソコン：Windows 98, Me, NT, 2000, XPのOSのもの(Macintoshは不可です)

必要ソフト：マクロプログラムの事前ダウンロードと、当日貸与されるCDからのコピー。詳細は、参加者に連絡申しあげます。

定員：30名

申込み締め切り3月20日(日)(ただし、定員になり次第締め切ります)

申込み先：電子メールで、中央大学経済学部 新井洋一宛 ([araiguma@tamacc.chuo-u.ac.jp](mailto:araiguma@tamacc.chuo-u.ac.jp); 件名に「研究談話会申込み」と必ず明記してください)

3日以内に返信いたしますが、返信がない場合は、再度お問い合わせください。

JAECS 東支部支部長  
新井洋一(中央大学)

#### 《実技講習・発表内容》

「言語コーパス分析のためのVBAモジュール」

上田博人(東京大学)

Word, Excel, Accessなど私たちが普段使っているソフトを利用してコーパス分析をする試みです。利用者が研究目的や研究方法に応じてVBA(Visual Basic for Application)のモジュールを変えながら自由にデザインできるマクロプログラム用のチップ集です。このようなプログラムのチップ集を共有のアーカイブにすることも提案したいと思います。申込者には、あらかじめマクロプログラムをダウンロードの上参加していただきます。

「Perlを用いて行うBNCの文法調査」

園田勝英(北海道大学)

BNCを利用する方法としては、Sara, WordSmith Tools, BNC Online等が広く利用されていますが、他にPerlなどの簡易言語を使う方法があります。この場合コンピュータやBNCそのものについて一歩踏み込んだ理解が求められる点が短所でもあり長所でもあります。一方、検索にいろいろな工夫をこらすこ

とが可能な点で代わるものはありません。この発表では、Perlやプログラミングの知識を前提とせずに、Perlを用いたBNCの調査を体験していただきます。例として同属目的語構文の網羅的抽出などを取り上げます。BNCをお持ちの方はデータをハードディスクにインストールして持参いただき、未所有の参加者にはサンプルデータを用意します。

#### 新入会員紹介

(個人の住所、電話番号およびe-mailアドレスは、オンライン版のニューズレターでは公開していません。郵送されるニューズレターをご覧ください。)

JAECS Newsletter No. 46(2004年12月9日発行)以降の新入会員の方は次の通りです(2月28日現在、Sは学生、敬称略)。

新井良雄	明法中学校・高等学校
浦井康男	北海道大学文学部
廣瀬絵美	名古屋大学大学院国際開発研究科S
遠峰伸一郎	松蔭大学
藤 正明	東京海洋大学海洋工学部
宮本正美	神戸市外国語大学
安原 章	東京大学大学院総合文化研究科S
李 相璽	武蔵野大学大学院言語文化研究科S

#### 住所・所属等の変更

島津美和子(株)東芝ソリューション プラットフォームソリューション事業部ソフトウェア開発部  
滝沢直宏 (住所変更あり)

#### 訂正のお願い

先のニューズレターNo.47の記載内容に誤りがございました。以下のようにご訂正ください。

汪 曙東 (e-mailアドレス変更あり)

#### 寄贈刊行物の紹介(到着順)

赤瀬川史朗・中尾浩『コーパス言語学の技法 言語データの収集とコーパス構築』A5判 並製 402頁 / 定価(本体3,800円+税) / ISBN4-931391-71-0 C3080.

石田基広「統計解析で探るシュティフター『石さまさま』 -- R言語による分散分析と多変量解析」, 『ドイツ語情報処理研究』第15号, pp.3-20, ドイツ語情報処理学会発行, 2004年10月

石田基広「線形判別式による文体の計量」, 『徳島大学言語文化研究』第12号, 徳島大学総合科学部発行, pp.85-114, 2005年2月.

齊藤俊雄・中村純作・赤野一郎 編『英語コーパス言語学 基礎と実践【改訂新版】』A5判 並製 325頁 / 定価(本体3,800円+税) / ISBN4-327-40139-0 C3082.

高橋薫(研究代表者)『応用言語学的視点による英語コーパスのテキストジャンルの再考』平成13年度-15年度科学研究費補助金 基盤研究(C)(1)研究成果報告書。

## 事務局から

### 会費納入のお願い

4月23日大会当日の受付は混雑が予想されますので、2005年度会費(一般5,000円、学生3,000円)は同封の郵便振替用紙を使い4月15日(金)までにお納めいただきますよう、ご協力をお願いいたします。住所、所属などに変更や異動のある方は、必ず通信欄にお書き添えください。なお郵便局発行の受領証をもって領収書に代えさせていただきますので、ご了承ください。学会の領収書が必要な場合は、必ず返送先を明記した返信用封筒(必要な切手を貼付したものを)を同封の上、高橋薫(豊田高専)までお願い致します。

2004年度会費未納の方は、2005年度分と合わせてお納めください(振替用紙にその旨記しております)。行き違いになりました場合は、何とぞご容赦ください。会誌『英語コーパス研究』第12号は2004年度の会費を納入していただいた方のみ配布となります。また、2年続けて会費未納の場合、*JAECs Newsletter*などの送付を中止させていただきます。

## その他

事務局では、シンポジウムやワークショップの企画・アイデアを随時募集しております。英語コーパス学会の大会プログラムとしてふさわしい内容のものがありませんでしたら、どしどしご提案ください。

FORUM欄への投稿もお待ちしております。海外の学会・研究の動向、新刊・近刊図書の紹介、身近なコーパス研究のエピソードなどでも結構ですのでお寄せください。

## FORUM

フィンランド言語学会に参加して

成沢 義雄(東北学院大学)  
narisawa@izcc.tohoku-gakuin.ac.jp

フィンランド言語学会が11月17日(木)、18日(金)、中世時代的首都トルク(Turuku)のアボ学術大学(Abo Akademi University)で開催された。今年の学会テーマ、“The Lexicon: Its Status in the Theory of

Language”のもとに予め学会で受理された30件の研究発表があった。発表使用言語はヨーロッパの言語学会での使用言語の通例で英語であった。

研究発表者は、フィンランド国内だけではなく、スウェーデン、イギリス、ノールウェイ、ドイツ、ベラルーシ、ギリシャ、イタリア、フランス、トルコと国際色豊かだったが、日本からは成沢義雄(東北学院大学)と町屋昌明(八戸工業大学)による反意語に関する共同研究(“Co-occurrence of Antonyms in a Context”)1件であった。なお我々の発表以外に、反意語の研究発表は2件行われた。

Charles & Miller (1989) が、反意語どうしは同一文中で共起する頻度が高いという反意語の共起仮説を提唱し、形容詞を用いてこの仮説を例証した。さらに Juatenson & Katz (1991) において、Charles らの反意語の共起仮説が正しいことが確認された。Fellbaum (1995) は、この仮説が形容詞の反意語にのみ限定されるのではなく、動詞、名詞の反意語でも適用されることを立証した。

筆者らは、500語の Cobuild CD-ROM Corpus を言語資料とし、反意語の共起仮説は、形容詞、動詞、動詞にのみに限定される言語事象ではなく、代名詞(he/she)、副詞、前置詞など、すべての品詞の間に見られる普遍的な言語現象であることを指摘した。さらに、この言語現象は、同一文にのみ限定される現象ではなく、文と文の間でも頻繁に起きることを指摘して、これまでの反意語共起仮説を大幅に修正、拡大する提案となった。

我々の提案に対し会場から活発な質疑がなされ、議長は、我々の持ち時間を10分間延長して、発表時間は40分を越えた。日本のコーパス英語研究の水準を示すものの一つの事例となれば幸いである。

## 新刊紹介(1)

中村 純作(立命館大学)  
jnakamur@gr.ritsumei.ac.jp

Newsletterの編集に直接携わらなくなったことと、相変わらずの自転車操業の毎日で新刊図書のご紹介が遅れてしまいました。今年度中にお送りいただいたものの中からいくつか紹介をさせていただきます。

少々遅くなってしまいましたが、まず、ご紹介するのは中尾佳行著『Chaucerの曖昧性の構造 (THE STRUCTURES OF CHAUCER'S AMBIGUITY)』です。本書は、昨年春、松柏社より出版されましたが、本学会運営委員である中尾佳行先生(広島大学)の長年にわたるChaucer研究の集大成と位置づけることができると思います。従来あまり行われてこなかったChaucerの意味論的研究を、その曖昧性に焦点を当

て、言語学的な観点から、コーパス言語学的手法を用いて記述・説明したもので、1980年代に始まる中尾先生の原著論文、口頭発表など24篇をもとに修正、加筆した労作です。

*Troilus and Criseyde* に焦点を当て、曖昧性が如何に生起するかを、テキスト、対人関係、言語表現の3領域にわたり解明することを目的にして、15章にわたる緻密な分析を行っています。特に、間テキスト性、談話文法、発話行為、メタファーやメトニミーの推論作用、語と語の意味のネットワークなどの最近の言語学の成果が取り入れられ、新しい切り口でChaucer研究に取り組んでいることが窺えます。

小生は浅学で詳細に渡るレビューは到底その能力の範囲を超えていますが、Chaucer研究者にとっては必読の書だと思われまゝ。充実した参考文献、系統だった索引にも著者の一貫したChaucer研究への姿勢が読み取れます。是非、ご一読下さい。(A5判 上製 451頁 / 定価(本体4,000円+税) / ISBN4-7754-0054-1)

次にご紹介するのは、やはり本学会の運営委員で、昨年春のJAECSの大会で、コロケーションに関するシンポジウム「コーパスとコロケーション」をコーディネーターとしておまとめいただいた堀正弘先生(熊本学園大学)が、同大学の学術出版補助金を得て昨年7月にPalgrave Macmillan (Basingstoke, Hampshire and New York)より出版された*Investigating Dickens' Style: A Collocational Analysis* です。エディンバラ大学のJohn E. Joseph教授によるForewordにも書かれていますが、堀先生が2001年から2002年にかけて客員研究員としてエディンバラ大学に滞在したおりに取り組まれていたテーマが、今回このような形で実現しました。

堀先生が長年取り組まれてきたDickens、スタイル、コロケーションの3つのキーワードを、460万語のDickensコーパスに基づいたコーパス言語学的な切り口で統合的に記述・説明した労作で、3部、8章から構成されています。第1部で文学テキストのコロケーション分析に対する理論的背景を明らかにした後、3つの章からなる第2部ではDickensに見られるコロケーションを普通よく目にするコロケーション、Dickensにより創作されたコロケーション、さらにそれらのOED2による初出時期と新語の同定からDickensの創造性に言及します。第3部では*Bleak House*を取り上げ、この作品がDickensの他の作品と比べて、語彙というよりはコロケーションにより特異な位置を占めていることが明らかにされます。伝統的なFirthのCollocationの定義から始まり、最近のSemantic ProsodyやColligationの新しい見方にも言及し、今後のコロケーション研究に対する示唆も与えてくれます。こちらもご一読下さい。(Mint 8vo-over

7¾"-9¾" tall ハードカバー 251頁 / 定価(\$69.95) / ISBN1-4039-2051-6)

最後にご紹介するのは、赤瀬川史郎・中尾浩著『コーパス言語学の技法 : 言語データの収集とコーパスの構築』です。本書は、本学会会員であり、TXTANAの開発者でもある赤瀬川史郎氏(Lago言語研究所代表)を第一著者として昨年の秋、夏目書房より出版されました。2002年秋に出版された『コーパス言語学の技法 : テキスト処理入門』の続編で、全4巻シリーズの第2弾として出版されたものです。コーパス言語学の第一歩となる言語データの収集とコーパスの構築法についての解説書ですが、第1巻の読者を対象にしています。

前半はデータ収集について、キーボードからのテキストの直接入力、OCRの利用、インターネットからのダウンロードが取り上げられ、効率的なデータ収集のためのいくつかのポイントが指摘されます。後半はコーパス編纂の実際について基本編と実践編に分けて解説されます。基本編ではPerlを利用したファイル・ディレクトリ操作、ファイル名の取得と分析、ファイル入出力、文字列処理など、テキストデータに共通する基本処理が扱われ、実践編では各種ファイル形式からテキストファイルへの変換、文字コード変換、テキスト加工・整形・置換、ファイル名変更などが扱われています。最後の2章ではスクリプト言語を利用しないGUIプログラムによるデータ収集と変換処理がまとめて取り上げられています。

後半は、CUIの基本に戻ってスクリプト言語を用いたテキスト処理を行いたい、あるいは、従来のGUIアプリケーションでは物足りないと思う研究者向けですので、素人にはやや高度だと思われまゝですが、コーパスに関心のある方にはやはりおすすりめです。シリーズの残りの2巻、『コーパス言語学の技法 : 専用ソフトによる言語分析』と『コーパス言語学の技法 : スクリプト言語による言語分析』は2005年中に出版の予定です。(A5判 並製 402頁 / 定価(本体3,800円+税) / ISBN4-931391-71-0)

以上、会員を中心に出版活動が活発になりつつある現状をご報告でき、非常に心強く感じた次第です。

#### 新刊紹介(2)

塚本 聡(日本大学)  
tukamoto@chs.nihon-u.ac.jp

『英語コーパス言語学 基礎と実践』が、2月に研究社より出版された。本書は出版より7年が過ぎた同名書籍の改訂版である。前版に引き続き齊

藤・中村・赤野 3 氏が編集に当たり、新たに 4 名を加えた 18 名の執筆者による包括的な内容となっている。前版を踏襲し、コーパス言語学の定義や編纂、検索、分析を扱う「第 1 部 基礎編」、語彙、文法、英語史、文体、辞書編集について事例を示しながらの「第 2 部 実践編」、電子辞書、英語教育、インターネットなどとの接点を論じる「第 3 部 関連分野」の 3 部 13 章で構成されている。

しかしながら、その内容は、前版から大幅な改訂がなされている。前版以後、公開や編集が進む American National Corpus や多数の構文解析コーパス、通時コーパスについての言及はもとより、構文解析コーパスの 1 例である ICE-GB の表示例の図、SARA や OED2 CD3 の検索例など各種ソフトウェアの紹介、さらに最新の研究事例が取り入れられ、各種数値データのグラフ化など、図表の点数が増加し、より視覚的になっている等、改訂点は多岐にわたる。

とりわけ、多数のスクリーンショットが取り入れられ、実際の手順を再現することが容易となっており、より実践的な性質をもつ点は大きな特徴といえる。特に Perl や正規表現の扱いは、実際の例とともにスクリプトが示され、統計を扱う章では、画面とともにカイ 2 乗検定や MI-score の操作手順が詳細に説明されている。スクリプトなどのプログラミングや統計は敷居が高いと感じている方も、容易に扱うことが可能となるだろう。

広範囲にわたる内容であり、初めて手にする方はもちろん、既に前版をお読みの方にも、本書は有益な情報を提供するであろう。(A5 判 並製 325 頁 / 定価(本体 3,800 円 + 税) / ISBN4-327-40139-0 C3082)

# 英語コーパス学会 Newsletter No. 49

June 8, 2005

■会長：中村 純作  
■事務局：〒615-8558 京都市右京区西院笠目町6 京都外国語大学 赤野一郎研究室  
■TEL：075-322-6103 ■郵便振替口座：00940-5-250586 (英語コーパス学会)  
■URL: <http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/index.html> ■E-mail: [i\\_akano@kufs.ac.jp](mailto:i_akano@kufs.ac.jp)

**JAECS**  
Japan Association for English Corpus Studies

## 第 25 回大会報告

### 概要

英語コーパス学会第 25 回大会は、4 月 23 日(土)、立命館大学衣笠キャンパスの恒心館で開催されました。当日は天候にも恵まれ、事務局の調べでは会員の参加者 117 名、新入会員 13 名、当日会員 31 名、合計 161 名の出席がありました。

午前中のワークショップは「Excel によるコロケーションの統計的指標の計算」と題して高見敏子先生(北海道大学)に講師を務めていただきました。コロケーションの統計指標である、MI と t-score についての意味と計算方法について段階を踏んだ懇切丁寧な説明を受けたあと、実際にエクセルを使っての実習に、定員を遙かに越える 72 名の参加者が熱心に取り組みました。

午後の大会では、中村純作会長(立命館大学)の開会の挨拶のあと、石川保茂先生(京都外国語短期大学)に司会をお願いし、年次総会が開かれ、平成 16 年度の決算と平成 17 年度の予算をお認めいただきました。大会にご出席いただけなかった会員の皆様には決算書と予算書を同封いたしますので、ご確認ください。

引き続き 2 件の研究発表、1 件の実践報告およびシンポジウムが行われました。概要につきましては、司会の先生にご執筆願いました「研究発表」、「実践報告」および「シンポジウム」をご覧ください。

大会終了後の懇親会には 58 名の出席がありました。荒瀬美沙子先生(立命館大学)に司会をお願いし、会長挨拶、乾杯のあと、会員同士の交流と情報交換でおおいに盛り上がり、午後 8 時にすべての大会行事が終了いたしました。

2 日間にわたり行われました第 20 回の記念大会の参加者は 148 名でしたが、それを上回る 161 名という学会史上最大の参加者を得まして、第 25 回大会を無事終えることができました。「順調に進み問題はなかった」、「大学への道案内が詳しくてよかった」、「帰りのバスの情報がありがたかった」というアンケートのご回答をいただき、事務局としてホッとしております。

す。これも、開催校である立命館大学の中村純作先生のもとに、朝尾幸次郎先生、梅咲敦子先生、杉森直樹先生、荒瀬美沙子先生、大学院の学生さんが一丸となって、大会の準備、受付、進行に協力して下さったおかげです。この紙上を借りて厚くお礼申し上げます。

### 研究発表

British National Corpus を用いた body 形および one 形不定代名詞の比較研究

紙谷 一彦(大阪大学大学院生)

somebody と someone など-body 形と-one 形の差異について、辞書などに書かれていることではあまりに不十分だということで、Jespersen (1914)、Quirk et al. (1985)、Bolinger (1976)らの先行研究および Svartvik & Linquist (1997)によるコーパスを用いた先行研究を踏まえて、British National Corpus を用いて、実態はどうかの調査を行っている。-body 形と-one 形の対比が話し言葉で約 7 : 3、書き言葉で約 2 : 8 という結果が提示された。また、書き言葉の場合、共起語のコレスポンデンス分析の結果を散布図に表示することにより、-body 形と-one 形それぞれに特徴的な語というものがあることが図表を用いて示された。また -body 形と-one 形で、含意の異なる用例が具体的に示された。-body 形と-one 形の違いについて興味ある分析結果であったが、結論がややぼやけていて、Bolinger (1976)が示唆したような含意の違いについてもう少しはっきりとさせてほしいとか、もう少し差異の生じる理由付けをしてほしいという意見があったが、今後の可能性は十分に示されたように思う。

(衣笠 忠司 大阪市立大学)

take a picture of はイディオムか? コーパスとウェブを利用して

廣瀬 絵美(名古屋大学大学院生)

Chomsky は take a picture of についてイディオムとしているが、果たして、イディオムといえるのか検討を行っている。秋元 (2002)、Bolinger (1975)らのイデオ



イオムの特徴に関する先行研究を紹介し、British National Corpus を用いて、いわゆるイディオム、軽動詞構文、自由連結の動詞句のそれぞれについて、無冠詞、不定冠詞、定冠詞などとの共起性の調査結果が示された。次に、受動操作による名詞句内部からの抽出可能性についても BNC だけでなく、Google を用いた結果や英語母語話者の判断が提示され、BNC に見つからない場合も、Google では見つかることがあることが述べられた。結果として、take a picture of は形式的特徴からはイディオムとは異なるが、受動操作の可能性という観点からは、結果としてイディオムと同じ構造になると考えられる。受動操作を受ける条件の1つとしては、動詞の頻度でなく、動詞の性質と目的語の性質であると結論づけている。ただ、Google のデータは不適切なものが多いことや、Chomsky は彼の理論上の分析のためにイディオムとしているだけで、普通のイディオム分析と違うことに注意が必要との意見があった。(衣笠 忠司 大阪市立大学)

policeman と police officer の使われ方 PC 表現の視点から

畠山 利一(大阪国際大学)

1969年から2004年までのpolicemanとpolice officerの使用状況の変遷とその背景について、PC表現の視点からデータ分析された貴重な研究発表であった。データとして9種類の新聞・雑誌(LexisNexis使用)を分析され、分析結果として、4つのタイプを示された。

1. policeman 優勢から police officer 優勢 1980年前後に逆転し、1990年代前期以降2対8の割合を示す。
2. policeman 優勢から police officer 優勢 1980年代後期から police officer 使用が増加し、2000年以降逆転。およそ4対6の割合。
3. policeman 優勢から policeman, police officer 1980年代初頭から police officer が増加し始め、1990年以降半々の割合。
4. policeman 優勢から policeman 優勢 現在に至るまで、圧倒的に policeman が優勢で、2000年以降にようやく police officer が2割を超えた。

背景として、語彙を使用した筆者の国籍、またメディアの保守性などの分析を通してPC表現への影響を考察された。フロアからは、「『保守的なメディアではPC表現は増加しにくい』という俗説の傍証として捉えてよいか」、「データ収集に単数・複数の区別はどうしたか」、「男性に関してはman系でよいという意識ではないか」など、活発な質問・議論が交わされた。今後、数の区別や文脈での区別を取り入れた研究が期待される。(新田 香織 近畿大学)

## 実践報告

### コーパスを活用する学習活動の提案

中條 清美(日本大学)・内山 将夫(情報通信研究機構)

TOEIC スコア 50~80 点アップを教育目標とする CALL 授業に、日英パラレルコーパスを活用する「データ駆動型の発見学習」(DDL)を取り入れた興味深い報告であった。データは、TOEIC スコアアップに内容的に有効な新聞記事(Daily Yomiuri)を選び、検索ツールは ParaConc (Barlow, 2002、有料)、機能は search, hot words, sort, そして KWIC を使用した。

コーパス活用の目標は、有効なツールとしてのコーパスに慣れ親しむ、語彙の「多義性」に対する気づきを導く、そして語彙の「量的拡大」と「質的進化」を可能にすることである。

発表では、具体的な授業の流れやタスクをわかりやすく紹介され、目標が概ね達成されたことを詳細に報告された。特に日本語があるということが、初級レベルの学生にとってはモチベーション持続に効果があった。また、DDLにおけるペア学習は授業に「楽しい変化」を生み出し、学生も肯定的に捉えている。学生のアンケートでは、目標の「多義性」への気づきへの感想が一番多かった。

フロアからは、一件の検索にかかる時間、タスクで扱う単語、英字新聞に対する評価などについての質問が出た。課題は語彙定着のための時間の取り方や、語彙定着効果の測定方法の工夫ということであろう。(新田 香織 近畿大学)

## シンポジウム

### コーパスと英語史研究 - Helsinki Corpus 以後

このシンポジウムは、Helsinki Corpus (1991年公開、以下HC)以後のコンピュータコーパスを利用した英語史研究の方向性・可能性を考えることを目的に企画された。本学会で英語史関係のシンポジウムが開催されたのは第7回例会(1996年4月)以来のことである。

まず、司会の西村秀夫(姫路獨協大学)がHC以後の研究の方向性として、(1)品詞標識・構文解析を施したコーパスの編纂や語数の拡大、(2)時代や地域を限定したコーパスや、特定のジャンルに絞ったコーパスの編纂、(3)後期近代英語のコーパスの編纂、(4)現代英語の通時的な変化への関心、(5)研究領域の拡大、の5つを指摘した。引き続いて、塚本聡講師(日本大学)が(1)、福元広二講師(鳥取大学)が(5)、水野和穂講師(広島修道大学)が(3)について、コーパ

ス編纂の最新の動向や、コーパスを利用した研究の特徴を具体的な事例をまじえながら報告した。

#### 英語史研究における構文解析コーパス

塚本講師は、HC を元に作成された構文解析コーパス(YCOE、PPCME2)を、質および量の面からHCと比較検討した結果を報告した。質の面では、省略要素、動詞の補部(不定詞、節)などについて具体的な検索事例が示された。量の面では、HCの元ファイルに対する増加率が大きいファイルについて、高頻度上位20語の順位をHCのそれと比較した結果が示され、特にPPCME2のファイルの場合、10位以下がHCと相関を示さないという興味深い事実が指摘された。

#### コーパスと初期近代英語研究

福本講師は、コーパスを利用した研究領域拡大の例として、語用論標識 I say, I tell you の発達を取り上げた。Shakespeare Corpus の用例から、語用論標識が出現しやすい環境が指摘された。また、フォリオや刊本の句読法の比較を通じて、語用論標識として確立していく過程が示された。さらに、Drama Corpus (1500-1900)の検索結果から確立の時期が1800年ごろであることが示された。

#### コーパスと後期近代英語研究

水野講師はまず、後期近代英語研究の現況と後期近代英語期を射程とするコーパスを紹介した後、わが国では馴染みの薄い ARCHER と NEET に関する情報を詳細に提供した。前者については編纂の歴史、コーパスデザイン、タグ、検索ツールが紹介され、検索例が示された。後者については編纂の背景にある Social Network Analysis の考え方が紹介され、今後のコーパス編纂に大きな影響を及ぼす可能性があることが指摘された。

質疑応答では、適切なコーパスサイズ、構文解析の整合性、書き言葉のコーパスにおける句読法の扱いや口語性の認定、ARCHER の公開可能性、など多岐にわたる質問が各講師に寄せられ、活発な議論が展開された。特に顧問の齊藤俊雄先生からは、編纂者の Milic 教授の死後入手不可能になっている COPC についての情報や、日本人研究者がコーパス編纂で貢献すべきであるとの示唆をいただいた。

英語史研究をテーマとするシンポジウムではあったが、質疑応答を通して、適切なコーパスサイズ、コーパス編纂の目的など、コーパス言語学全般に関わる問題にまで踏み込むことができたように思う。

(西村 秀夫 姫路獨協大学)

## 人事に関する決定事項について

大会前日の4月22日午後6時より開かれた運営委員会において、堀正広先生の学会誌編集委員就任および山崎俊次先生の再任が承認されました。

### 第26回大会の日程と研究発表募集

2005年度の秋期大会(第26回大会)は10月22日(土)に昭和女子大学(〒154-8533 東京都世田谷区太子堂 1-7 渋谷駅から東急田園都市線で2つ目「三軒茶屋駅」下車、徒歩5分)で開催される運びとなっております。是非、今から出張の予定に組み込んで頂ければ幸いです。会長、大会準備委員、事務局ともどもお待ちしております。

大会での研究発表を次の要領で募集いたします。発表を希望される方は、下記の要領に従って、電子メールで事務局にお申し込みください。

- 【資格】本学会会員であること。
- 【内容】本学会にふさわしい、コーパス利用・コンピュータ利用を中心に据えた研究。
- 【提出物】発表要旨をA4判25字×32行で3~4枚以内にまとめMS Word、一太郎、PDFファイルのいずれかで提出すること。ただし、参考文献表は枚数に含めない。要旨の冒頭には題名のみを記す。メール本文には氏名(ふりがな)、所属・職名、住所、電話番号、電子メールのアドレスを明記すること。
- 【応募締切】2005年6月25日(土)必着
- 【採否決定】2005年7月25日(予定)
- 【その他】発表20分+質疑応答10分

## 会誌『英語コーパス研究』第12号について

第12号は4本の論文と1本の研究ノートを掲載しています。いずれの論考もコーパスを利用したものでありますが、その研究対象、研究手法とも多様なもので、コーパス言語学の幅の広さをあらためて感じさせられます。

Kimura Kano 論文は、ペアをなす同義の既存の語と新規借入語の分布や用法の違いをBNCを用いて明らかにしたものです。中條・内山・長谷川論文では、教育現場での実践的利用を念頭に、各種時事英語資料の特徴語抽出に8種類の統計的指標を適用し、語彙選定における統計的指標の有効性が考察されています。Iyeiri, Yaguchi, Okabe は Corpus of Spoken Professional American English に観察される discourse particle としての like に焦点を当て、文体と性差によるその現れ方の違いを論じています。小林論文は学習者コーパスに見られる「“have”+名詞」のコロケーションを調査し、日本語からの類推によってコロケー



ションを作ってしまう傾向を指摘し、自然な言語運用のためには連語的つながりの知識が必要であると説いています。研究ノートでは Ioroi が 12 の派生接尾辞について Time 誌と The Times 紙での生産性の違いを比較し、同じ接尾辞の生産性に地域差がある可能性を示唆しています。

以上、各論考の主旨を簡単にまとめましたが、いずれも力のこもった研究ばかりですので是非お読み下さい。

最後になりましたが、投稿された執筆者の方々にお礼を申し上げますとともに、査読にご協力いただいた先生方、山崎、塚本、岡田編集委員、励ましの声をかけてくださった中村会長、赤野事務局長にこの場をお借りして感謝申し上げます

大津 智彦 (大阪外国語大学)

『英語コーパス研究』編集委員会委員長

## 会誌『英語コーパス研究』第 13 号について

『英語コーパス研究』第 13 号の原稿を次の要領で募集いたします。会員各位の積極的な投稿をお待ちしております。

### 【原稿の種類】

1. 英語コーパス利用・コンピュータ利用を中心に据えた「研究論文」、「研究ノート」
2. 「書評」、「コーパス紹介」、「ソフト紹介」、「海外レポート」、「論文紹介」などの各種情報あるいは紹介原稿

【投稿申込締切】2005 年 6 月 30 日 (木)

(氏名、所属、原稿の種類とタイトルを下記原稿提出先までお知らせください。)

【原稿提出締切】2004 年 9 月 30 日 (金)

(ハードコピー 4 部およびフロッピーディスクを提出。)

### 【問い合わせ先・原稿提出先】

〒562-8558 大阪府箕面市粟生間谷東 8-1-1  
大阪外国語大学 地域文化学科ヨーロッパ II 講座  
大津智彦

TEL/FAX: 0727-30-5373 (直通)

Email: n.otsu@excite.co.jp

### 【原稿の長さ】

1. 研究論文  
英文 70 ストローク×35 行×15 枚以内  
和文 35 字×30 行×15 枚以内  
(いずれも Abstract (英文) 注、書誌を含む。)
2. 研究ノートは 10 枚以下、その他は研究論文の半分以下。

【書式】第 12 号所収の論文を参考にしてください。詳細は学会ホームページ (<http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/Guidelines/style.html>) でご確認ください。

【採用通知】11 月頃

【刊行予定】2006 年 3 月 25 日

『英語コーパス研究』編集委員会

### 2006 年度の大会日程と開催校

第 27 回大会 4 月 22 日(土) 広島大学

第 28 回大会 10 月 7 日(土) 北海道大学

## JAECS 東支部活動報告

英語コーパス学会東支部では、前号で案内しました以下の談話会を開催しました。

日時: 2005 年 3 月 27 日 (日) 13:00 ~ 18:00

場所: 中央大学理工学部 (後楽園) キャンパス  
5 号館 2 階 5233 教室

参加費: 1,000 円 (学生 500 円 会員無料)

「言語コーパス分析のための VBA モジュール」

上田 博人 (東京大学)

「Perl を用いて行う BNC の文法調査」

園田 勝英 (北海道大学)

新しい試みとして、参加者には Windows ラップトップパソコンをご持参いただき、実技講習会を加えた談話会とさせていただきます。年度末の忙しい時期にもかかわらず、熱心に講師を務めていただいた先生方と、議論に加わっていただいた多くの参加者 (30 名) の皆様に心から感謝申し上げます。

新井 洋一 (中央大学)

JAECS 東支部支部長

## 新入会員紹介

JAECS Newsletter No. 48 (2005 年 3 月 7 日発行) 以降の新入会員の方は次の通りです (5 月 20 日現在、S は学生、敬称略)。(個人の住所・電話番号・email アドレスは、オンライン版のニューズレターでは公開していません。郵送されるニューズレターをご覧ください。)

伊藤 恵哉 京都市立紫野高等学校

梅田 紘子 武蔵野学院大学国際コミュニケーション学部

大谷 直輝 京都大学人間環境学研究所 S

大野 裕 立命館大学

上村 崇 明海大学大学院応用言語学研究所 S

北尾 謙治 同志社大学

木原 恵美子 京都大学人間環境学研究所 S

木村 修平 立命館大学大学院言語情報教育研究科 S

嶋村 誠 関西学院大学

鈴木 夏樹 駿河台大学現代文化学部 S

瀧野 けんじ 会社員

田中 誠 長崎国際大学人間社会学部

野澤 和典 立命館大学

早川 宏美 明海大学大学院 S

三浦 真磁 神戸大学自然科学研究科 S

水本 篤 甲南女子大学

山崎 のぞみ 関西外国語大学

吉川 裕介 京都外国語大学大学院 S

吉成 雄一郎 東京電機大学

事務局では常に最新の正確な情報を会員の皆様にお届けするよう会員名簿の管理には万全の注意を払っております。今年度の会員名簿を同封いたしておりますので、ご確認いただき、誤りや異動がございましたら事務局までご一報ください。

### ハンドアウトのダウンロードサービス

第 25 回大会の研究発表およびシンポジウムのハンドアウトをご希望の会員に、ダウンロードのサービスを行います。期間限定で、このニューズレターお届けより約 2 週間(6 月 13 日より 6 月 27 日まで)とします。ファイルは PDF となっております。御希望の方は、高橋薫(takahasi@toyota-ct.ac.jp)まで下記のハンドアウトのうちご希望の番号をお知らせください。追って URL をお知らせいたします。(以下敬称略)

1. British National Corpus を用いた body 形および one 形不定代名詞の比較研究 (紙谷一彦)
  2. take a picture of はイディオムか? (廣瀬絵美)
  3. policeman と police officer の使われ方 (畠山利一)
  4. コーパスを活用する学習活動の提案 (中條清美)
  5. コーパスと英語史 (西村秀夫)
  6. 英語史研究における構文解析コーパス (塚本 聡)
  7. コーパスと初期近代英語研究 (福元広二)
  8. コーパスと後期近代英語研究 (水野和穂)
- 末尾になりましたが、ハンドアウトを提供くださいました方々の御厚意に感謝いたします。

### 事務局から

#### 年会費納入のお願い

2005 年度会費(一般 5,000 円、学生 3,000 円)未納の方には払込取扱票を同封しておりますので、6 月末日までにお納め下さい(手数料 70 円は学会で負担いたします)。6 月末日までに文書による退会申し出がない限り、今年度も会員を継続されるものと了解致します。

郵便局発行の受領証をもって領収書に代えさせていただきます。なお領収書が必要な方は、80 円切手を同封の上、高橋薫(〒471-8525 愛知県豊田市栄生町 2-1 豊田工業高等専門学校)までお申し出下さい。払込取扱票の通信欄によるお申し出はご遠慮ください。

2004 年度会費未納の方は、2005 年度分と併せてお納めください(払込取扱票にその旨記しております)。行き違いになりました場合は、何とぞご容赦ください。2 年続けて会費未納の場合、*JAECs Newsletter* などの送付を中止させていただきます。

住所、所属等に変更や異動のある方は、必ず通信欄にお書き添えください。

## その他

事務局では、シンポジウムやワークショップの企画・アイデアを随時募集しております。英語コーパス学会の大会プログラムとしてふさわしい内容のものがありましたら、どしどしご提案ください。

FORUM 欄への投稿もお待ちしております。海外の学会・研究の動向、新刊・近刊図書の紹介、身近なコーパス研究のエピソード等でも結構ですのでお寄せください。

## FORUM

### Windows 用英文品詞タガーの紹介

後藤 一章 (大阪大学大学院生)  
fortune@myrealbox.com

現在公開されている品詞タガープログラムの多くが UNIX ベースとなっています。そのため、こうしたプログラムを Windows 上で操作するためには Cygwin のような特殊なプログラムを別にインストールする必要があります。さらに、操作には UNIX コマンドの知識が必要とされ、Windows の GUI (Graphical User Interfaces) に慣れたユーザにとっては、若干とっつきにくい感があると思われます。そこで、Windows 上で動作し、マウス操作のみで品詞タグ付けが可能なツールを作成しましたので、紹介させていただきます。

特徴として、本ツール (GoTagger) は Eric Brill 氏が作成された Rule-Based Tagger (別名 'Brill's Tagger') のタグ付け規則ファイルを利用しています。そのため、本ツールの実行の際には、まず Brill's Tagger をダウンロードし、そこに含まれる 10 種類のタグ付け規則ファイルをコピーすることになります (詳細は筆者の Web ページをご覧ください)。

GoTagger の動作画面は以下のようになります。



基本的には、ファイルを選択し、「Start」ボタンを押すだけでタグ付けが行われます。複数のファイルを同時に処理することも可能です。処理が終了すると、次のような画面になります。



本ツールの処理速度は約 10,000 ~ 15,000 語/秒程度で、タグ付けの精度はテキストのレジスターにもよりますが、およそ 96% 前後と、Brill's Tagger とほぼ同じです。

さらに、GoTagger とは別に、WindowsXP のコマンドプロンプト (cmd.exe) から実行可能な GoTagger\_cmd も公開しています。こちらは、次のようなコマンドによって実行されます。

```
> GoTagger_cmd.exe input.txt > output.txt
```

GoTagger\_cmd は、GoTagger に比べてより柔軟な処理が可能です。例えば、次のようなパイプ処理を行うことで、タグ付けされた結果から固有名詞を含む行だけをテキストに出力する、といった処理も一度に行えます。

```
>GoTagger_cmd.exe input.txt | find "NNP" > output.txt
```

本ツールに興味を持たれた方は以下の Web サイトからダウンロードし、コメントなどをお寄せいただければ幸いです。

[http://uluru.lang.osaka-u.ac.jp/~k-goto/use\\_gotagger.html](http://uluru.lang.osaka-u.ac.jp/~k-goto/use_gotagger.html)

### LLC Advance Accessについて

高橋 薫 (豊田工業高等専門学校)  
takahashi@toyota-ct.ac.jp

最近、雑誌等のオンライン化が目立ってきました。研究分野の論文を Web 上で閲覧が可能になったおかげで、研究のテンポも飛躍的に向上したと言えます。

JAECs もまた、既刊の学会誌『英語コーパス研究』の目次の閲覧とアブストラクトのダウンロードサービスを提供していることは、みなさん、ご周知のことと思います。

そのおかげもあってか、最近、バックナンバーを購入したいとの申し出が多いように思います。

ところで、オックスフォード大学出版の *Literary and Linguistic Computing (LLC)* では、魅力的な機能のウェブサービスを提供しておりますので、ご紹介いたします。

ALLC (The Association for Literary and Linguistic Computing) と ACH (The Association for Computers and Humanities) の共同の機関誌になった LLC につきましては、『英語コーパス言語学』(改訂新版)第1章で齊藤先生がお書きのように、コーパス言語学の発展にも重要な貢献をしたものです。

ところで、コーパス言語学専門誌 *IJCL (International Journal of Corpus Linguistics)* は講読しているものの、LLC はそうではないという方のために、LLC Online がおすすめです。ことに LLC は次号の記事を刊行前にアップロードしていますので、読者が刊行前に読み、意見を述べるができる試みをしている点に特徴があります。

手前味噌ではございますが、この度、小生の投稿論文が採用となり、LLC Advance Access published online として、以下の URL にアップロードされております。  
<http://llc.oupjournals.org/cgi/rapidpdf/fqi028v1>

この時点ですと、Abstract がフリーということですが、ここで、オックスフォード大学出版より届いたメールの一部をご紹介します。

You (and your co-authors) plus any users of your own personal/institutional web site(s) will get open access to the finally published and authoritative version of the article that is available from our site whether or not they are a subscriber to the Journal...

このように、著者である私からこのウェブサイト上で、e-mail this article to a friend を操作して、特定の方にメールをお送りすると、直に URL の案内が送られます。その方が LLC Advance Access に入ると、PDF の論文そのものをフリーでダウンロードできるという仕組みです。

そのようなことで、もし、‘A Study of Register Variation in the British National Corpus’なる拙論にご興味がおありの会員がたは、ご一報ください。ご批評等いただければ幸いです。

## 新刊紹介

井上 永幸 (徳島大学)  
inoue@ias.tokushima-u.ac.jp

本学会運営委員である西納春雄氏(同志社大学)が『英語学習者のための情報リテラシーブック』をこの

4月に大修館書店より刊行された。大学でのCALLラボや情報処理室を使った英語授業での利用を前提として編集されているが、高校生から大学生、さらには英語力を上達させようとする社会人にも役立つよう工夫されている。

著者は、インターネットやコンピュータの発達によって、容易に様々な生の英語に接することができるようになったことは喜ばしいが、これまで教科書や限られたチャンネルを通して伝わってくる「良質」な英語のみにふれていた英語学習者が、様々な生の英語情報の中で情報の質を見分け、目的や課題に合致する情報を取得することが求められるようになったと述べる。本書は、このような環境において、「コンピュータとインターネットを利用した総合的な英語力の向上」を目的として編まれている。

本書の基本的な構成は、「コンピュータの基本操作、基本ソフトの利用法」、「パラグラフィティングからエッセイライティング」、「ホームページ閲覧と作成、公開」、「電子メールの利用法」、「プレゼンテーション」、「Web 英語のリーディング」、「インターネットの情報検索」、「文献検索と英語表現検索」、「単語の整理」、「Web 情報の評価」、「Web からニュースを取得」、「Web 英語のリスニング」、「電子辞書の使いこなし」からなる。本書の特徴は単なるコンピュータリテラシーで終わるのではなく、コンピュータをあくまでも英語力向上のためのツールとして活用するという立場が貫かれている点である。Lesson 5~8においては、英文作成の基礎から書式まで扱われているし、Lesson 21~22では8ページにわたってインターネットをコーパスとして利用する技術が紹介されている。巻末(pp. 82-109)のAppendixにも本文に勝るとも劣らない情報が提供されている。例えば、「プレイジャリズム(剽窃)の戒め」、「電子メールのマナー 1~3」、「コンピュータウイルスとコンピュータの安全対策」、「ショートカットキーのまとめ」など、すでにコンピュータを使いこなしているユーザーにも参考になる点が多い。索引も完備され、求める情報に的確にアクセスできる上に、参考文献一覧表でさらなる学習・研究へと発展できるよう配慮されている。

コンピュータリテラシーを絡めた語学授業をされている先生方、インターネットを英語学習・研究に活用したい方々の一読をお勧めする。(B5判 並製 111頁 / 定価(本体 1,300円 + 税) / ISBN 4-469-24502-X)





# 英語コーパス学会 Newsletter No. 50

Sept. 8, 2005

■会長: 中村 純作  
■事務局: 〒615-8558 京都市右京区西院笠目町6 京都外国語大学 赤野一郎研究室  
■TEL: 075-322-6103 ■郵便振替口座: 00940-5-250586 (英語コーパス学会)  
■URL: <http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/index.html> ■E-mail: [i\\_akano@kufs.ac.jp](mailto:i_akano@kufs.ac.jp)

**JAECS**  
Japan Association for English Corpus Studies

## 第26回大会のご案内

英語コーパス学会第26回大会は、10月22日(土) 昭和女子大学で開催されます [〒154-8533 東京都世田谷区太子堂1-7 渋谷駅から東急田園都市線で2つ目「三軒茶屋」駅下車、南出口より徒歩5分 <http://www.swu.ac.jp/swu.html>]。会場校の金子朝子先生、小林多佳子先生のご尽力に感謝いたします。

詳しくは、同封の「大会資料」をご覧くださいのですが、今大会では恒例の午前中のワークショップのほか、研究発表4件と特別講演を準備いたしました。

研究発表につきましては、運営委員会の査読を経て、7月24日(日)に昭和女子大学で開かれた大会準備委員会での最終審査の結果、石部尚登氏(大阪大学大学院生)の「コーパスを用いた英語『誤用』研究 英語母語話者による『誤用』の使用と地域差」、小林多佳子氏(昭和女子大学)の「動詞“feel”の用法 学習者コーパスと母語話者コーパスを用いた比較分析」、磐崎弘貞氏(筑波大学)の「意味重視・量重視・総合的指導の3指導法が高校生ライティングに及ぼす影響」、成田真澄氏(東京国際大学)と杉浦正利氏(名古屋大学)による「日本人大学生による英語接続語句の使用に関する研究」の4件が選ばれました。

今大会の特徴としては、学習者コーパスの利用、あるいは英語教育への応用に関する研究発表が3件を占めていることが挙げられます。今後この方面の研究が益々盛んになっていくものと思われます。

特別講演では、Language and Computers: Studies in Practical Linguistics シリーズの編者であり、*English Corpus Linguistics: An Introduction* の著者でもある Charles F. Meyer 氏 (University of Massachusetts Boston) に“Planning, Creating, and Analyzing ‘Small and Beautiful’ Corpora: The Story of the International Corpus of English”の演題でお話しいただきます。

恒例となっております午前中のワークショップでは、前回の高見敏子氏(北海道大学)の「Excelによるコロケーションの統計的指標の計算」を受けて、中條清美氏(日本大学)を講師に「語彙分析入門: lemma リストの作成」と題して、語彙分析に欠かせ

ない lemmatization の講義と実習を行います。奮ってご参加ください。

参加御希望の方は、電子メール(件名「ワークショップ申込」)で、所属と会員・非会員の別を明記の上、事務局宛にお申し込みください。今回は設備の関係で先着48名に限らせていただきます。なお、見学のスペースには若干余裕があります。英語コーパス学会の会員であれば参加費は無料です(非会員の場合は当日会費1,000円で、ワークショップと大会の両方に参加していただけます)。

## 講演会のご案内

26回大会にお招きした Charles F. Meyer 氏の講演会を、下記の要領で開催いたします。奮ってご参加ください。

日時: 10月24日(月) 18時30分~20時

場所: 同志社大学今出川キャンパス 至誠館

([http://www.doshisha.ac.jp/daigaku/campus/non\\_imade/index.html](http://www.doshisha.ac.jp/daigaku/campus/non_imade/index.html))

交通機関: 近鉄「竹田」駅経由地下鉄烏丸線に乗り換え、JR「京都」駅から地下鉄烏丸線に乗り換え、地下鉄烏丸線「今出川」駅下車徒歩1分、京阪「出町柳」下車徒歩15分

参加費: 無料

演題: Online Corpora: The World Wide Web and the Lexis/Nexis Database

## 『英語コーパス研究』第13号について

『英語コーパス研究』第13号(2006)の原稿を募集しましたところ、論文6件の申し込みを頂きました。その他に特別寄稿としてヘルシンキ大学の Matti Rissanen 先生に原稿を依頼中です。また、春の大会で催されたシンポジウムの収録も予定しています。『英語コーパス研究』では論文のほか、研究ノート、書評、海外レポートなども募集しています。まだ執筆申し込みをされていない会員の方も、原稿締め切りの9月末日までに原稿を送付いただければ、

審査の対象となりますので、ぜひとも奮ってご投稿ください。なお、投稿規定については [http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/Guidelines/ECS\\_SGuide-j.html](http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/Guidelines/ECS_SGuide-j.html) をご覧ください。

『英語コーパス研究』編集委員会委員長  
大津 智彦（大阪外国語大学）

#### 学会賞応募規定

第5回の学会賞を募集致します。応募規定は次の通りです。

【対象】英語コーパス学会の目的に照らし、英語のコーパス言語学に関する優れた研究業績をあげた学会員（個人またはグループ）とする。ただし、奨励賞は応募期限日において35歳以下の個人に限る。

【応募方法】自薦、他薦を問わない。

【提出書類】1) 同封の推薦理由書。

2) 対象となる研究業績の現物またはコピー。

【提出先】事務局

【応募期限】2006年3月31日

【発表】2006年度秋季大会

#### JAECS 東支部第3回研究談話会のご案内

JAECS 東支部では、第3回研究談話会を以下のとおり開催いたします。皆様のご参加をお待ち申し上げます。事前申し込み不要で、参加費も無料です。

日時：2005年9月24日（土）14:00～18:00

場所：中央大学理工学部（後楽園）キャンパス3号館3階3310教室

交通機関：地下鉄丸の内・南北線後楽園駅から徒歩5分、都営三田線・大江戸線春日駅駅から徒歩7分、JR 総武線（中央線と併走）水道橋駅から徒歩15分

[http://www.fse.chuo-u.ac.jp/guide/00\\_guid.html](http://www.fse.chuo-u.ac.jp/guide/00_guid.html)

参加費：無料

発表内容：

清水 眞（東京理科大学）

「日本語の自他の交替と英語の他動詞＋再帰形構文」

鳥飼慎一郎（立教大学）

「コーパス言語学から見た判例における話法」

問合せ：中央大学経済学部 新井洋一

E-mail: [araiguma\\_chuou@yahoo.co.jp](mailto:araiguma_chuou@yahoo.co.jp)

Tel: 0422-32-6606

JAECS 東支部支部長  
新井 洋一（中央大学）

#### 新入会員紹介

（個人の住所・電話番号・e-mail アドレスは、オンライン版のニューズレターでは公開していません。郵送されるニューズレターをご覧ください。）

下川 郁子 名古屋経済大学

山田 聖剛 長崎国際大学教務部国際交流課

Ruiz Tinoco Antonio 上智大学

#### 住所・所属等の変更

岩井 千春（住所・電話番号変更あり）

内山 将夫（住所変更あり）

須賀 あゆみ（住所・電話番号変更あり）

中尾 浩（住所・電話番号変更あり）

舟木 てるみ（住所・電話番号変更あり）

船城 道雄（住所・電話番号・e-mail アドレス変更あり）

巳波 義典（住所変更あり）

吉成 雄一郎（住所・電話番号変更あり）

吉村 由佳（住所・電話番号・e-mail アドレス変更あり）

Ronald Jim（住所・電話番号変更あり）

若山 真幸（e-mail アドレス変更あり）

#### 訂正のお願い

先にお送りした会員名簿の記載内容に誤りがございます。以下のようにご訂正ください。

田口 純（住所訂正）

田中 省作（住所・電話番号・e-mail アドレス訂正）

宮本 正美（誤：宮元正美）（e-mail アドレス訂正）

井村 誠（e-mail アドレス訂正）

#### 寄贈刊行物の紹介（到着順）

Okada, T. "A Corpus-based Study of Spelling Errors of Japanese EFL Writers with Reference to Errors Occurring in Word-initial and Word-final Positions," in



V. Cook and Bassetti, B (eds) *Second Language Writing Systems*, 2005 pp.164-183.

吉村耕治. 「現代英語表現に見られる言語変革運動の成果」『人権教育思想研究』第8号, 2005 pp. 118-141.

## 事務局から

### 年会費納入のお願い

2005 年度会費(一般 5,000 円、学生 3,000 円)未納の方には払込取扱票を同封しておりますので、お納めください(手数料 70 円は学会で負担いたします)。郵便局発行の受領証をもって領収書に代えさせていただきます。なお領収書が必要な方は、80 円切手を同封の上、高橋薫(〒471-8525 愛知県豊田市栄生町 2-1 豊田工業高等専門学校)までお申し出ください。払込取扱票の通信欄によるお申し出はご遠慮ください。

2004 年度会費未納の方は、2005 年度分と併せてお納めください(払込取扱票にその旨記しております)。行き違いになりました場合は、何とぞご容赦ください。2 年続けて会費未納の場合、*JAECs Newsletter* などの送付を中止させていただきます。

住所、所属等に変更や異動のある方は、必ず通信欄にお書き添えください。

### その他

事務局では、会員名簿のできる限り正確な管理に努めております。誤りや変更がございましたらご一報ください。

FORUM 欄への投稿もお待ちしております。海外の学会・研究の動向、新刊・近刊図書の紹介、身近なコーパス研究のエピソード等でも結構ですのでお寄せください。

## FORUM

### バーミンガム大学でのコーパス大会

赤須薫(東洋大学・バーミンガム大学客員研究員)  
K.Akasu@bham.ac.uk

7月15日(金)~17日(日)の3日間にわたり、バーミンガム大学とランカスター大学共催による Third Biennial Corpus Conference がバーミンガム大学

において開催された。この大会前日の14日(木)には、Adam Kilgariff らによる The web as a corpus など 5 つのテーマに分かれたワークショップが先行して行われた。英国のみならず、ヨーロッパ各国、米大陸、そして日・中・韓などのアジアからの発表者・参加者も多数見られた。外部からの参加者はおおよそ 200 名ほどであった。裏事情をお話するならば、全体会議の会場である大教室の座席数に限りがあったため、6月中旬以降は申し込みをお断りしなければならぬ状態であった。残念ながら参加が認められず無念に思われた方も多かったであろうと拝察する。

基調講演として 4 名の講師が招待された。Alison Wray は心理言語学の立場からパターンについて、Mike Scott は *Romeo and Juliet* を題材にした key words の分析について、Anna Mauranen は ELF(=English as a lingua franca)の特性について、Tony McEnery は数世紀前の新聞の記事を題材にした key words の有効性について講演をし、それぞれ極めて興味深い考察を披露してくれた。

研究発表の方はおおよそ 120 件なされた。発表者の中には、Sylviane Granger, Hilary Nesi, Knut Hofland, Antoinette Renouf, Michael Barlow といったおなじみの名前も並んだ。各時間帯 5 会場ある中で、当然ながらひとつにしか顔を合せなかったが、いずれも活発な質疑応答と熱い議論が交わされていた。

日本人の発表者・参加者としては、松本裕治氏(奈良先端科学技術大学院大学)、投野由紀夫氏(明海大学)、前川喜久雄氏(国立国語研究所)、阿部真理子氏(高崎経済大学)、Ueyama Motoko 氏(ボローニャ大学)、山田茂氏(早稲田大学)らがいた(すべての方のお名前を出せずご容赦の程を)。

初日の夕べには緑に囲まれた Shackleton Hall でのディナーが用意され、その後半には Corpus Interruptus というバンドによる生演奏があった。年齢を感じさせない(失敬!)ダンスには目を見張り、楽しいひと時を過ごすこととなった。

この大会に参加して一番強く印象に残ったことは、コーパスを利用した発表の内容が実に多岐にわたっていることであった。corpus が tool であることを再認識させられる、実に有意義な三日間であった。

(ついでながら、この期間中 BNC Baby 2.0 のプレ・リリース版が £5 で 50 枚限定販売された。正式版は 9 月に出るとのこと。BNC Baby の詳細に関しては、<http://www.natcorp.ox.ac.uk/babyinfo.html> を参照されたい。)

# 英語コーパス学会 Newsletter No. 51

Dec. 1, 2005

■会長: 中村 純作  
■事務局: 〒615-8558 京都市右京区西院笠目町 6 京都外国語大学 赤野一郎研究室  
■TEL: 075-322-6103 ■郵便振替口座: 00940-5-250586 (英語コーパス学会)  
■URL: <http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/index.html> ■E-mail: [i\\_akano@kufs.ac.jp](mailto:i_akano@kufs.ac.jp)

**JAECS**  
Japan Association for English Corpus Studies

## 第 26 回大会報告

### 概要

英語コーパス学会第 26 回大会は、10 月 22 日(土) 昭和女子大学で開催されました。事務局の調べでは会員の参加者 83 名、新入会員 6 名、当日会員 21 名の合計 110 名の参加がありました。この参加者数は昨年(2004)の日本大学文理学部で開催された 24 回大会の 112 名にほぼ匹敵する数で、関東での大会開催が安定してきたと言えそうです。

恒例になっております午前中のワークショップは「語彙分析入門: lemma リストの作成」と題して、中條清美先生(日本大学)と内山将夫先生(情報通信研究機構)に講師を務めていただきました。word-form と lemma の基本的な説明の後、Knoppix on CD-ROM を使用しての lemmatization の実習と、Excel を利用したレマリスト比較の説明が行われました。「解り易く楽しく受講しました」、「大変有用な内容で、レマタイゼーションの利点と問題点が理解できた」等のアンケートの回答もあり、密度の濃い内容のワークショップに 45 名の参加者が熱心に取り組まれました。なお、当日使用した CD-ROM とデータは参加者全員に配布していただきました。お二人の講師の先生にこの紙上を借りてお礼申し上げます。

午後の大会では、中村純作会長(立命館大学)の開会の挨拶のあと、開催校を代表して、昭和女子大学の池上嘉彦先生からお言葉を頂きました。ミニ講義を思わせるご挨拶は先生のお人柄が現れており評判を呼びました。その後、学会賞選考委員長の中尾佳行先生(広島大学)より、第 4 回の学会賞の発表と選考経過の説明がありました(第 5 回学会賞の募集をしております。5 頁の規定に従い奮ってご応募ください)。

引き続き 4 件の研究発表および Meyer 先生の特別講演が行われました。概要につきましては、司会の先生にご執筆いただきました「研究発表報告」と新井洋一先生(中央大学)の詳細な「特別講演報告」をご覧ください。

大会終了後の懇親会には 40 名の会員の参加がありました。新井恭子先生(東洋大学)の司会のもと、中村会長のご挨拶と山崎俊次先生の乾杯のあと、会員同士の交流と情報交換が行われました。学会賞受賞者の堀正弘氏や特別講演の Meyer 先生のスピーチなどで大いに盛り上がり、来年の春期大会開催校である広島大学の中尾佳行先生の閉会の辞で午後 8 時 15 分ごろにすべての大会行事が終了いたしました。

「特段滞りもなくとても良かった」、「会場の交通の便が大変よかった」などのアンケートのご回答を頂きました。これも、開催校である昭和女子大学の金子朝子先生、小林多佳子先生および高味み鈴先生の献身的なお力添えがあつてのことでした。また、80 年館のオーロラホールという素晴らしい場所をご提供いただいた昭和女子大学にもこの紙上を借りて厚くお礼申し上げます。学生の皆さんにも、会場準備、受付などのお手伝いを頂き大変お世話になりました。お礼申し上げます。

### 第 4 回英語コーパス学会賞決定!

#### 学会賞

受賞者: 堀正弘氏(熊本学園大学教授)  
受賞対象: *Investigating Dickens' Style: A Collocational Analysis* (Basingstoke, UK: Palgrave Macmillan, 2004)

#### 奨励賞

受賞者: 伊藤彰浩氏(愛知学院大学助教授)  
受賞対象: 「口語英語の記述と分析による関係節の難度に関する仮説の妥当性検証」(*JACET BULLETIN*, No. 40, The Japan Association of College English Teachers, 2005, 15-27)

### 研究発表

コーパスを用いた英語「誤用」研究 英語母語話者による「誤用」の使用と地域差

石部 尚登(大阪大学大学院生)

英語母語話者の「誤用」を英語地域変種コーパスにみることにより、英語の言語内的な権力性、階層性を明らかにしようとするのがこの発表の意図である。発表者は社会言語学の分野の研究に従事しており、英語母語話者の誤用を社会言語学の視点で観察することを試みたものである。使用したコーパスは「米 (Brown, Frown)」、 「英 (LOB, FLOB)」、 「豪 (Australian Corpus of English)」、 「ニュージーランド (Wellington Corpus of Written New Zealand English)」、 「インド (Kolhapur Corpus of Indian English)」、 「誤用」の概念はこれを広くとらえ、様々な文献で「誤用」として実際に提示されているものを対象としている。

英語地域変種諸コーパスの中に生起する「誤用」の分析を通して、次の2点を明らかにした。

「誤用」と地域差の関係：時代を超えて、また言語現象を捉える様々な視点において、「誤用」として提示される用法は、英国・米国の英語と比較して、それ以外の周縁的な国々の英語において高い頻度で使用される傾向。

「中心 - 周縁」の英語観：「誤用」を提示する書がとる「英・米 vs. その他の英語国」という構図。

対象とした誤用について、「果たして誤用とするのか？」というフロアからの質問のとおり、「誤用」という点だけから見れば大きな課題を残したが、発表者は「『誤用』をいかに捉えるか」を先行研究の吟味をもとに明らかにしようとしていることは伺えた。言語の誤用 非標準 変種の生起を社会言語学の立場から観察して、コーパス言語学に新しい手法を提示することが期待される発表であった。

西村 公正 (関西外国語大学短期大学部)

動詞 "feel" の用法 - 学習者コーパスと母語話者コーパスを用いた比較分析 -

小林 多佳子 (昭和女子大学)

日本語、中国語、イタリア語、フランス語という4つの異なる言語背景を持つ英語学習者コーパスの比較分析を、さらに2つの英語母語話者コーパスと比較してみると何が見えるか。この発表は学習者コーパスの持つ新たな研究の可能性を示したものである。手法としては動詞 "feel" を軸にした。

それぞれの学習者コーパスにおける "feel" の用法の意味別頻度には、固有の傾向が存在し、それは必ずしも母語話者データにおける傾向と一致するものではない。さらに、動詞 "feel" の共起語として出現した副詞など修飾語をみると、学習者コーパスと母語話者コーパスの間には違いがみられた。日本人学習者データでは動詞 "feel" を修飾し、感情の強さを表現する共起語は出現しておらず、他の学

習者データにおける用例も母語話者コーパスと比較して極めて限定されたものであった。一方、母語話者データにおいては "feel" と共起する修飾語は多様で、感情の強さ、確実性などをより具体的に述べる傾向が見られた。"feel" の用法とその共起表現に、学習者の母語や帰属文化における経験などの影響を観察し得ることが示唆された。日本人の英語コーパス研究は母語直観を持たない弱点 (時に武器) を持つが、日本人学習者コーパスを研究対象に含めた場合は事情が一転する。本発表に提示された例文はこの意味で興味深い。日本人の "I felt that my host family was like my real family." を発表者は「控えめな 'think' に該当する」意味と解釈した。日本人が加わることによってこの解釈が disputable となる事実だけでも、本発表が学習者コーパス研究の多様な可能性を内包することを示していると言えよう。

西村 公正 (関西外国語大学短期大学部)

意味重視・量重視・総合的指導の3指導法が高校生ライティングに及ぼす影響

磐崎 弘貞 (筑波大学)

本発表は、高校生の英作文指導において、(1) 文章の一貫性・構成、(2) 量、(3) 読む・書く・話すを結びつけた総合的指導、の各視点からフィードバックを与え、得られた文章の分析をもとにこれらの指導法の有効性を検証したものである。明示的な文法指導をしなくても文法力の向上が見られたことや、(3) は (1) のフィードバックをその一部に持つにもかかわらず他の方法をしのぐメリットが見つからなかったこと、など目を引く結果が報告された。質疑においてはこの「意外」な結果をいかに説明するかという点に焦点が集まった。また、T-unit の取り扱い、協力してくれる高校との問題など、実際の作業に伴う手間も報告された。

久保田 俊彦 (明治大学)

日本人大学生による英語接続語句の使用に関する研究

成田 真澄 (東京国際大学)

杉浦 正利 (名古屋大学)

本発表は、英語学習者コーパスと英語母語話者コーパスを用いて、日本人大学生学習者の接続語句使用をアメリカ人大学生のそれと比較し、量的・質的な分析を試みたものである。接続語句全般の過剰使用 (個々には過少使用もあり) 文頭での頻度が高い、などの結果と共にネイティブスピーカーによる使用の適切性判断の結果が示された。文の論理性を示す手段として接続語句に依存しすぎているという推論も示された。質疑では、接続語句の使用を単独の問題とするのではなく、主語の定め方など、テキストのコヒージョンを担う諸デバイスとの関連

で語られるべきであるという指摘(発表者のハンドアウトにも言及あり)にうなずけるものがあった。  
久保田 俊彦(明治大学)

#### 特別講演

Planning, Creating, and Analyzing 'Small and Beautiful' Corpora: The Story of the International Corpus of English (ICE)

まず ICE の目的、各部門を構成する対象国、具体的設計内容について説明がなされた。従来のコーパスと比べた ICE の新しい特徴として、話し言葉と書き言葉の両テキストが単一コーパスにまとめられている点、英語の国別のサンプルを収録している点を挙げられた。完成した部門は、Great Britain, East Africa (Kenya and Tanzania), India, New Zealand, Philippines, Singapore、進行中の部門は、Australia, Canada, Caribbean (Jamaica), Hong Kong, Ireland, South Africa, United States ということである。BNC や Bank of English などの大規模コーパスに比べ小規模なコーパスであるが、構成標識(話者識別、会話重複部、文区分など)、品詞標識(名詞、動詞など)、文法標識(機能、句範疇、素性)といった、従来より細かい標識付けをおこなっている点で、大規模コーパスにない利点があるという。対象サンプルはテキスト全体でなく一部のみを収録している、一部の理論に偏る危険性を秘めた標識付け、頻度の低い言語項目の分析が阻まれやすい、対話文に比べて多すぎる単独話文、多すぎる下位ジャンル、といった問題点の指摘が紹介された。妥当な分析のためには、以上のような問題点や限界を考慮に入れて、ICE コーパスを扱うことが重要であると述べられた。

本題に入り、二つの具体的な研究成果が紹介された。最初の研究 Pseudo-Titles in Press Reportage Taken from Various ICE Components は、Variation across national varieties を分析テーマにしたもので、固有名詞の前に置かれる擬似肩書き(pseudo title)と呼ばれる用法に関する研究である。具体的には *Boston attorney* Richard Bell, *chief executive* Larry Lasser, *defrocked priest* Paul Shanley, *linguist* Noam Chomsky などのイタリック体部分に関する研究である。擬似肩書きの特徴として、対象人物について言及する最初の文にのみ現れ、アメリカの新聞・雑誌で始まり(Quirk *et al* 1985:276 note)、連合王国の新聞・雑誌で広まるが、タブロイド紙と異なり、*Times*, *Guardian*, *Independent* などの高級紙(broadsheet)では誤用とみなされ(stigmatized)、ニュージーランドの新聞・雑誌では、最初誤用とみなされていたが最近は一般的になっている(Bell 1988)、といった点が紹介された。連合王国部門で、擬似肩書きを使う新聞と使わない新聞の比率がほぼ半々である点を除けば、ほとんどの調査対象国の新聞・雑誌です

に確立されている、という調査結果が明らかにされた。結びとして、連合王国を除く多くの国の英語の用法が、アメリカの新聞・雑誌の用法に従っているのは、国際英語としての英語の進化に、アメリカのメディアが強い影響力を持っている(Crystal 1997:82-95 参照)からであろうと論じられた。

次の研究発表は、Variation across genres をテーマにしたもので、生成変形文法家たちによって多くの議論がなされてきた空所化(Gapping)に関するものであり、Hongyin Tao (UCLA)との共同研究成果(Tao and Meyer 2005)の報告である。空所化される部分の構造の種類として、VP (V), VP (VP+O), Adverbials/modals/auxiliaries、そして Determiners (McCawley 1993)があり、McCawley の例を除き、ほとんどが、生成文法家たちの直観に頼った例文である点に言及された。また、Kuno (1976) は、Minimal Distance Principle など、機能的観点(知覚、意味、情報の流れ)による複数の制約によって生成文法家たちの説明を補っているが、用例が言語直観に基づくものである点で限界があると述べられた。

研究内容は、空所化の頻度はどの程度か、空所化のパターンはどのようなものか、一部の空所化構造が他の空所化構造より頻度が高いのはなぜか、あるとすれば、空所化に対する一般的な認知的・文脈的制約はどのようなものか、といった点に関するものである。対象コーパスは ICE-GB で、用例検索の方法として、Fuzzy Tree Fragments (FTF) モードによる検索にも言及された。ICE-GB からの用例収集の結果として、空所化 120 例(0.007%)(全等位構造文 17,629 例)が提示された。空所化は実際の英語の文脈では、非常にまれな統語現象であるのに、アメリカの文法家たちは、皮肉にも大量の時間とエネルギーを費やしてきたと話された。

空所化のジャンル別分布率としては、Dialogues of any kind (0%), Spontaneous monologue (0.08%), Planned monologue (0.11%), Speech-inclined Written (0.2%), Prototypical Written (0.26%)という調査結果を提示された。現実の対話文では空所化は起こらず、空所化は個人単独の文で起こる。文脈も練られた内容であればあるほど、空所化の頻度も高くなる。典型的な書き言葉のジャンルで空所化構造の頻度がもっとも高いのは、そのためであろうと論じている。この結果、空所化は、対話型の話し言葉では避けられる傾向が強く、よく練られた内容の文におもに生起することになると説明づけている。等位構造は、2つの等位構造からなる用例が 112 例(93.3%)、3つ以上の等位構造からなる用例が 8 例(6.7%)であるという。等位接続詞の種類別の頻度分布は、and 101 例(84.2%), but 1 例(0.8%), 接続詞なし(asyndetic) 15 例(12.5%), or 3 例(2.5%)である。接続

詞なしの例は、頻度がきわめて低く、文学的内容が濃いものである。

空所化要素の頻度分布に関しては、aux 53 例 (44.2%), copula 30 例 (25.0%), VP 27 例 (22.5%), VP+ その他 10 例 (8.3%)となっている。生成文法でもっとも扱われた VP, VP+その他の空所化例 (30.8%) は、頻度がもっとも高い例ではなく、be/have-aux や copula などの内容的に薄い動詞的要素の空所化例の頻度の方が高い (69.2%)、といった事実が示された。対話型の話し言葉の文は、つかの間のものであり、簡潔性よりも繰り返しが好まれる (Tannen 1989, Meyer 1995)点、空所化は認知的に話し手にも聞き手にも負荷が大きく、多くの時間がかけられる練られた文脈においておもに許容されると述べている。そして、「文 (音調単位) ひとつにひとつの新情報」という制約 (Givón 1975, Pawley and Syder 1983, Chafe 1979, 1994) が関わっている可能性が示唆された。最後に、ICE-GB を選んだのは、標識がすべてつけられ、文法解析もおこなわれており、ICE-CUP のようなすぐれた検索ツールがあるからであり、残念ながら、他部門ではICE-GBのように詳細な分析はできそうにないと付け加えられた。

質疑応答では、Internet 検索による用例収集に関する問題、空所化について音調面からの理由づけの可能性、FTF の利用法、ICE-CUP の設定法、限定詞削除を空所化例とみなす妥当性、擬似肩書きの、原稿のある話し言葉と原稿のない話し言葉での生起の相違、頻度の少ない構造例のICE-GBでの検索の可能性、といった多くの質問が出され、Meyer 博士から丁寧な応答がなされた。生成文法学者の頼る直観をチョムスキーは美点とみなしているが、博士は限界と捉えていると力説されたり、この4月、チョムスキーがコーパス言語学をガリレオ以前の物理学になぞらえているのを聞き、博士はお世辞と思ったが、チョムスキーは蔑んで述べていた、とユーモラスに話されたのが特に印象深い。

新井 洋一 (中央大学)

#### ハンドアウトのダウンロードサービス

第26回大会の研究発表およびシンポジウムのハンドアウトをご希望の会員に、ダウンロードのサービスを行います。期間限定で、このニューズレターお届けより約2週間(12月19日まで)とします。ファイルはPDFとなっております。御希望の方は、高橋薫 (takahasi@toyota-ct.ac.jp) まで下記のハンドアウトのうちご希望の番号をお知らせください。追ってURLをお知らせいたします。(以下敬称略)

1. コーパスを用いた英語「誤用」研究—英語母語話者による「誤用」の使用と地域差—(石部尚登)

2. 動詞“feel”の用法—学習者コーパスと母語話者コーパスを用いた比較分析—(小林多佳子)
3. 意味重視・量重視・総合的指導の3指導法が高校生ライティングに及ぼす影響(磐崎弘貞)
4. 日本人大学生による英語接続語句の使用に関する研究(成田真澄・杉浦正利)
5. Planning, Creating, and Analyzing ‘Small and Beautiful’ Corpora: The Story of the International Corpus of English (Charles F. Meyer)  
末尾になりましたが、ハンドアウトを提供くださいました方々の御厚意に感謝いたします。

#### 第27回大会の日程と研究発表募集

2006年度の春期大会は4月22日(土)に広島大学(〒739-8511 東広島市鏡山1丁目3番2号; <http://www.hiroshima-u.ac.jp/>)で開催されます。是非、今から出張の予定に組み込んでいただければ幸いです。大会準備委員、会長、事務局ともどもお待ちしております。

大会での研究発表を次の要領で募集いたします。発表を希望される方は、下記の要領に従って、電子メールで事務局にお申し込みください。

【資格】本学会会員であること

【内容】本学会にふさわしい、コーパス利用・コンピュータ利用を中心に据えた研究。

【提出物】発表要旨をA4判25字×32行で3~4枚以内にまとめMS Word、一太郎、PDFファイルのいずれかで提出すること。ただし、参考文献表は枚数に含めない。要旨の冒頭には題名のみを記す。メール本文には氏名(ふりがな)所属・職名、住所、電話番号、電子メールのアドレスを明記すること。

【応募締切】2006年1月8日(日)必着

【採否決定】2006年1月末日(予定)

【その他】発表20分+質疑応答10分

会誌『英語コーパス研究』第13号について

『英語コーパス研究』第13号(2006)に多くのご投稿を頂きありがとうございました。今回は研究論文8本、授業実践報告が1本とこれまで以上に多数の論文が寄せられました。現在、第1次の審査をようやく終了し、採否決定の後、必要に応じて改訂などをお願いしているところです。投稿された論文を見ますと、その本数の多さに加え、統語論、形態論、文体論、英語史、英語教育とその分野が多岐にわたるところからコーパスはもはや英語にまつわる研究には欠かせないツールである印象を強く持ちます。次回もコーパス研究の活力が感じられるような



積極的なご投稿をお願いいたします。なお、13号ではこの他にも春のシンポジウムおよびヘルシンキ大学の Rissanen 先生からの特別寄稿の掲載も予定しています。

最後に、今後とも会員のご協力を得ながら、より質の高い学会誌の編集をめざしたいと思っていますので、引き続きご支援、ご指導を賜れば幸いに存じます。

『英語コーパス研究』編集委員長 大津 智彦

#### 学会賞応募規定

第5回の学会賞を募集致します。応募規定は次の通りです。

【対象】英語コーパス学会の目的に照らし、英語のコーパス言語学に関する優れた研究業績をあげた学会員(個人またはグループ)とする。ただし、奨励賞は応募期限日において35歳以下の個人に限る。

【応募方法】自薦、他薦を問わない。

【提出書類】1) 同封の推薦理由書。  
2) 対象となる研究業績の現物またはコピー。

【提出先】事務局

【応募期限】2006年3月31日

【発表】2006年度秋季大会

#### 東支部活動報告

英語コーパス学会東支部では、2005年9月24日(土)に中央大学後楽園キャンパで第3回英語コーパス学会東支部研究談話会を開催しました。熱心に講師を務めていただいた先生方と、参加者の皆様に心から感謝申し上げます。演題と講師の先生は次の通りでした。

日本語の自他の交替と英語の他動詞+再帰形構文  
清水 眞(東京理科大学)

コーパス言語学から見た判例における話法  
鳥飼 慎一郎(立教大学)

参加者数は13名でしたが、活発な議論がおこなわれ、有意義な談話会となりました。各発表者のハンドアウトは、以下の場所からダウンロード可能です。

<http://english.chs.nihon-u.ac.jp/jaecs/workshop/conference3.html>(鳥飼先生のは来年3月までです)

JAECs 東支部支部長 新井 洋一

#### 新入会員紹介

JAECs Newsletter No. 50(2005年9月8日発行)以降の新入会員の方は次の通りです(12月1日現在、Sは学生、敬称略)

(個人の住所・電話番号・e-mailアドレスは、オンライン版のニューズレターでは公開していません。郵送されるニューズレターをご覧ください。)

市川 誠 青山学院大学大学院 S

金 秀景 ソウル延世大学 S

小林 雄一郎 法政大学大学院 S

高橋 新 ニューカッスル大学(英国) S

寺門 伸 獨協医科大学

韓 栄均 ソウル延世大学

平本 哲嗣 安田女子大学

李 志恵 ソウル延世大学 S

矢形 朋由 東京大学大学院 S

#### 住所・所属等の変更

(変更の詳細については、郵送されるニューズレターをご覧ください。)

新井 恭子 東洋大学

神谷 健一 大阪工業大学

杉浦 千早 名古屋外国語大学(非常勤)

田上 芳彦 駿台予備学校

中條 清美

二宗 美紀(旧姓:中村)立命館大学大学院 S

#### 事務局から

##### 会費納入のお願い

2005年度会費(一般5,000円、学生3,000円)未納の方には郵便振替用紙を同封致していますのでお納め下さい。郵便局発行の受領証をもって領収書に代えさせていただきます。住所、所属等に変更や



異動のある方は、必ず通信欄にお書き添えください。

2004 年度会費未納の方は、2005 年度分と併せてお納めください（振替用紙にその旨記しております）。行き違いになりました場合は、何とぞご容赦ください。2 年続けて会費未納の場合、JAECs Newsletter などの送付を中止させていただきます。

#### その他

事務局では、シンポジウムやワークショップの企画・アイデアを随時募集しております。英語コーパス学会の大会プログラムとしてふさわしい内容のものがありませんでしたら、どしどしご提案ください。

FORUM 欄への投稿もお待ちしております。海外の学会・研究の動向、新刊・近刊図書の紹介、身近なコーパス研究のエピソード等でも結構ですのでお寄せください。

### FORUM

#### マイヤー先生、目と舌で京都を味わう

石川 保茂（京都外国語大学）  
yasuishikawa@hotmail.com

10 月 24 日の京都はマイヤー先生を歓待するべく、まさに快晴、行楽日和。いそいそと京都ガーデンパレスにお迎えに行く。

まずは金閣寺、そして、竜安寺へ。京都をご案内するなら、このふたつははずせない。賛成していただけたかどうか不安だったが、竜安寺で尋ねてみた。「meditation して見ますか」「オーケー」。ほっ。長身の先生と並んで座禅を組む。観光シーズンに入る前の、竜安寺の朝の静寂、鳥の声すらも意識から遠のいていく。かわりに、流れるはずのない石庭の、砂の流れ落ちる音が聞こえてきそうになる。座禅を終えて先生がつぶやく、「この庭は見る人によって解釈が違うんだよね」日本人顔負けの理解度。

ランチには「テンプラ」を食していただく。マイヤー先生は特に「エビ」のプリプリ感がお気に召したもよう。「デリシャス！」のお言葉を頂戴する。

てんぱら屋さんは建仁寺裏手にある。そこから歩いて八坂通りを抜ける。八坂の塔が見える。二年坂を越え、三寧坂を越え、清水へ。あまりアルコールを召し上がらない先生が選んだスーベニールはしかし、「杯」。黒地にさくらともみじの散らし模様。秋色深まる清水の舞台から京都の町並みを望む。そ

のまま歩いて平安神宮へ。マイヤー先生は健脚である。先生は、平安神宮の大鳥居よりも、神宮内の神苑にお心を動かされたご様子。「ふるさとボストンのトレッキングコースを思い出すよ」とのこと。ちょっとホームシック気味になられたかな、と少々心配に。そこで、夕食は西洋料理がよろしいか、とお尋ねしたところ、いやいやせっかく日本に来たのだから、と、夕食は創作和食にすることに。ホームシックとは杞憂。同志社大学今出川キャンパスで行われた講演（演題：Online Corpora: The World Wide Web and the Lexis/Nexis Database）のあと、とある日本料理店に。先生は日本の景色も食事も味わい尽くそうと積極的だった。「アメリカで食べたのも含めて、今日の和食は今までで一番おいしいよ」との感想までいただいた。

次の日は 11 時にお迎えに行き、御所散策。その後関空へ。先生は最後にこちらを振り向いて「Keep in touch!」とおっしゃったが、それは私の背中へのむこうの「日本」にもおっしゃったように聞こえた。

Keep in touch!

#### コーパス言語学と批判的談話分析

石部 尚登（大阪大学大学院生）  
naoto19@aol.com

沈黙の 5 年間で明けて本年度の IJCL (10:1) にウォルヴァーハンプトン大学の Debbie Orpin の論文 Corpus Linguistics and Critical Discourse Analysis が掲載されました。コーパスを用いた批判的談話分析 (CDA) の研究ですが、このようなコーパス言語学の手法の CDA への適用については 1990 年代に活発な議論がなされた経緯があります。しかしながら世紀が変わりこのところは、両者の組み合わせが話題となることは（管見のかぎりでは）ほとんどなくなりました。ここでは、そのような 90 年代の議論を簡単に紹介し、今後の展望について考えてみたいと思います。

CDA は言説に埋め込まれたイデオロギー・社会的な不平等を暴くことを目的に批判的な視点で談話を分析します。このような CDA に対して様々な問題が指摘され、激しい批判がなされてきましたが、とりわけ「資料選択の恣意性」が重大な問題の 1 つとされました。CDA 研究者がしばしば自分にとって好ましい解釈を支持するようなテキストのみを資料として選択し分析を行っているとの H.G. Widowson の批判がそれです。まさにこのような問題から CDA 研究でのコーパスの使用が主張されることになりました。

1995 年に G. Hardt-Mautner によって「コンコーダンスプログラムの使用と CDA の伝統的質的分析を

組み合わせる代案分析手法」が提案され、その2年後には M. Stubbs (1997)も同様に両者の組み合わせの必要性を説きました。彼は「短い断片的な資料に限定された分析が適当なのかどうか」と疑問を呈しています。このような中で実際に Krishnamurthy (1996)などいくつかの研究が現れることになりました。

しかし前述のようにこの約5年間は沈黙の時期となりました。CDA 研究が大きく発展する一方で、コーパスの適用が試みられなくなった理由は定かではありません。恐らくは、どのようにコーパス言語学の手法を適用するのが明確にはされなかったことがその要因の1つであったのではと推測できます。90年代に行われたコーパスを用いた CDA 研究では、問題となりそうな単語や数語のフレーズをあらかじめ設定し、その(否定的)コノテーションを探るという手法以上の方法論的な深化は見られませんでした。

このように CDA の研究に対して実際にどのようにコーパス言語学の手法を適用させるのかという課題は残っています。しかし先の Orpin の論文や、日本では神戸大学の石川慎一郎先生の発表(JACET 英語辞書学ワークショップ)など今年になって発表された研究を契機として、コーパス言語学と批判的談話分析のより高いレベルでの結び付きを考えていきたいと思えます。ご教示よろしくお願ひいたします。

- Hardt-Mautner, G. (1995) 'Only Connect' *Critical Discourse Analysis and Corpus Linguistics*, UCREL Technical Papers.
- Krishnamurthy, R. (1996) 'Ethnic, racial and tribal: the language of racism?', in Caldas-Coulthard, C.R. & Coulthard, M. (eds.) *Texts and Practices: Reading in Critical Discourse Analysis*, Oxford: Routledge, pp. 129-49.
- Orpin, D. (2005) 'Corpus Linguistics and Critical Discourse Analysis: Examining the ideology of sleaze', *International Journal of Corpus Linguistics*, 10(1), pp. 37-61.
- Stubbs, M. (1997) 'Whorf's children: critical comments on Critical Discourse Analysis (CDA)', in Ryan, A. & Wray, A. (eds.) *Evolving Models of Languages*, Clevedon, pp. 100-16.

### 北京とソウルからの強烈なメッセージ 世界大競争時代に突入の予感

成沢 義雄 (東北学院大学)  
narisawa@izcc.tohoku-gakuin.ac.jp

11月3日から5日まで第3回 Asia TEFL が北京で開催された。大会参加者は 47ヶ国、研究発表件数

は 400 余、これは発表応募者一千数百件の中から選ばれたものである。大会は豪華な 23 階建ての高級ホテルを 4 日間借り切ったの一大イベント。費用は 10 億円以上とのこと。壮大な国際大会には度肝抜かれた。これは中国が国家レベルから個人レベルに至るまでも英語教育にかけるといふ並々ならぬ決意であり、アジアのみならず世界へ向けての自己存在をアピールしているかのように私には思えた。北京オリンピックへ向けて中国は熱く燃えている。

私は Gender in English and TEFL について Keyword とその周辺語と連結との関係からコーパス BNC を駆使しての研究を報告した。会場からはコーパスについていくつかの熱心な質問を受けた。この地ではコーパス英語研究はこれから始まるのであろう。帰国直後に上海大学の若い先生からメールを受けた。その一部を紹介する。"I attended your presentation in 3rd Asia TEFL and had strong impression on your study of corpus linguistics." この短い文から、コーパス言語学の中国での状況およびコーパス言語のなしうる可能性の広さと深さがわかるであろう。

11月19日は韓国応用言語学会の招きでの Plenary Speech. 300人ほどの参加者。Technology in Applied Linguistics についての講演を行い、コーパスの英語研究および教育への有用性についても話した。もうひとり Birmingham 大学の Dr. Susan Hunston で、彼女もコーパスの有用性を多くの実例を挙げて話した。彼女との歓談のなかで日本人では Jun Nakamura (中村純作氏)がこの分野ではいい仕事しているとのこと。

午後からは分科会で、研究発表 24 例の中で 22 例は英語で発表された。参加者の大多数は韓国人であっても英語についての研究発表は英語ですという、ごく当然のことが隣国韓国では当然に行われている。ひるがえって、日本のコーパス英語研究会では同じことができるのであろうか。韓国の大学の英語教師の 90%が Ph.D を取得とのこと。ここには、世界へ向けて自分の研究の成果を発信するという強烈な意志とそれを果敢に実行する力がある国とそれが無い国との違いがある。Poster session は大教室に小学校の英語の教師から、企業の人に至るまで、それぞれが開発したハイテクを駆使した(そのほとんどはコンピュータ)教材の一大デモンストラーション場で一日中賑わいを呈していた。出版社や企業からのさまざまな商品(大判の Oxford 辞書だけでも 50 点以上)を参加者に気前よく配っていた。企業の協力も半端ではない。学校も企業も個々人も英語に取り組む姿勢は真剣そのものであった。

総体としての国民の英語力がその国の運命をも左右することをわきまえている中国と韓国がわれわれの隣人であることを強烈に意識しつつ、私は北京とソウルの学会から帰国の途についた。